

アトピー性皮膚炎より気管支喘息への移行に関して — 血清IgE値およびIgE RAST scoreに 関する検討 —

国立療養所南福岡病院小児科

小田嶋 博*、西間 三馨**

要約：気管支喘息およびアトピー性皮膚炎患者について血清IgE値および卵、ミルク、大豆、ダニに対するIgE RAST scoreについて検討した。その結果、気管支喘息患児ではアトピー性皮膚炎患児に比して加齢とともにIgE値の上昇とダニのRAST scoreが高値を示す傾向がみられた。

見出し語：気管支喘息、アトピー性皮膚炎、血清IgE、IgE RAST score

1. はじめに

小児におけるアレルギー疾患は近年増加している。小児ではアレルギー疾患はアレルギーマーチという経過をとることが知られており、多くはアトピー性皮膚炎から気管支喘息へと移行する。しかし、アトピー性皮膚炎患児のなかには気管支喘息に移行せずにアレルギーマーチからぬけていく者もある。この両者の相違について検討することは、アレルギー疾患の治療および予防を考える上で重要であると考えられる。今回はこの両者について血清IgE抗体価について検討し報告する。

2. 対象および方法

対象は国立療養所南福岡病院小児科を気管支喘息またはアトピー性皮膚炎のために初診した4歳以下の患児330名である。この患者を気管支喘息、気管支喘息とアトピー性皮膚炎の合併例、アトピー性皮膚炎の3群に分け、今回は相違点を明確にするために、気管支喘息群とアトピー性皮膚炎群について検討した。初診時に純粋な気管支喘息と診断された者は94名、アトピー性皮膚炎と診断されたものは99名であった。この両群について血清IgE値およびIgE RAST値について検討した。

次に初診時にアトピー性皮膚炎と診断された患児のうち、初診時年齢が6カ月から1歳の者を選び、

* 国立療養所南福岡病院小児科 (Department of Pediatrics, National Minamifukuoka Chest Hospital) ** 国立療養所南福岡病院 (National Minamifukuoka Chest Hospital)

その後の臨床経過と血液学的検査の経過が追跡できたものについて気管支喘息発症者と非発症者に分けて検討した。その結果、22例が追跡でき、うち8例に気管支喘息の発症がみられた。そこで、気管支喘息発症者と非発症者について血清IgE値およびIgE RAST値について分析した。

3. 結果

(1) 血清IgE値

気管支喘息児：0歳では約50%が50U/ml以下であり、最も高いものでも200U/ml以下であった。

1歳を過ぎると徐々に高値のものが増加し4歳になると800U/ml以上のものが約25%になる。

一方、80%以上が20U/ml以上の値をとる。

アトピー性皮膚炎児：0歳時にすでに高値のものがみられ、800U/ml以上を示すものもみられる。全年齢で40~50%が20U/ml以下の値を示し、4歳になっても20U/ml以下を示すものが約40%あることは気管支喘息群とは異なる。2歳以上では400U/ml以上の値を示したものはいなかったのも気管支喘息群と異なる点である。

(2) 卵白特異的IgE値(RAST score)

気管支喘息児：全年齢で0が50%以上を示していた。全ての年齢では3以上のものはみられなかった。

アトピー性皮膚炎児：2歳以下では0は50%以下。3歳、4歳では50%以上であった。しかし2歳では3以上が25%以上であった。3歳、4歳でも約20%が3以上を示した。

(3) ミルク特異的IgE値(RAST score)

気管支喘息児：全年齢で0が50%以上であるが、年齢とともに0の者の割合が増加し4歳では80%が0を示した。また、全例が2以下であった。

アトピー性皮膚炎児：全年齢で0が約50%とということは気管支喘息児と同様であった。しかし、加齢とともに0の割合が増加することはなかった。逆に最高の値は3~4であり、その割合が増加傾向を示した。

(4) 大豆特異的IgE値(RAST score)

気管支喘息児：殆どの患児が0を示していた。4歳では約25%に1~2の値を示す者がみられた。

アトピー性皮膚炎児：全年齢で約70%が0を示していた。この割合が年齢で変化しないのは他の卵や牛乳と似ていた。逆にいえば低年齢でも高い値を示したものがあるということになる。

(5) ダマシ特異的IgE値(RAST score)

気管支喘息児：2歳で約30%、4歳で約15%が0を示した。2歳で50%以上が2以上。4歳では75%以上が3以上を示していた。

アトピー性皮膚炎児：2歳時に0を示した者が50%以上であり4歳で約25%と低年齢時には低い者が多かった。

(6) アトピー性皮膚炎~気管支喘息に移行した者のIgE値の変化：

加齢とともに上昇している者が多く、上昇している時に発症している者が多い(7/8)が中には低下中に発症した者(1/8)もいる。

(7) アトピー性皮膚炎~気管支喘息に移行した者のIgE値の変化：

加齢にともなう変化は一定していない。

(8) アトピー性皮膚炎の経過と血清特異的 Ig E 値:

卵、ミルク、ダイズに対する RAST score の加齢ともなう変化はアトピー性皮膚炎から気管支喘息に移行した者としなかった者との間に相違はなかった。

ダニに対する RAST score は気管支喘息に移行した者は 4 / 7 例で上昇、2 / 7 例では初めから 4 のままで変らず。1 / 7 例では 0 のままであった。

これに対して気管支喘息に移行しなかったものでは 6 / 14 例で上昇、3 / 14 例で 3 から

4 に上昇。1 / 14 例で 0 のままであった。

なお気管支喘息が発症しなかった例では 8 / 14 例に抗アレルギー薬が使用されていた。気管支喘息発症例でも 5 / 8 例に何等かの抗アレルギー薬が使用されていた。

4. 結 論

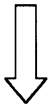
気管支喘息群ではアトピー性皮膚炎に比較して血清 Ig E 値が加齢とともに高値を示していた。気管支喘息群では低年齢時からダニに対する RAST score は高値を示していた。

Abstract

Serum IgE in asthma and atopic dermatitis patients

Hiroshi Odajima, Sankei Nishima

Serum IgE and RAST score (egg, milk, soy and mite) in asthma and dermatitis patients were examined. In asthmatic patients, serum IgE and RAST score for mite showed relatively high titers compared to those in dermatitis patients.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:気管支喘息およびアトピー性皮膚炎患者について血清 IgE 値および卵、ミルク、大豆、ダニに対する IgE RAST score がついて検討した。その結果、気管支喘息患児ではアトピー性皮膚炎患児に比して加齢とともに IgE 値の上昇とダニの RAST score が高値を示す傾向がみられた。